

## 第2回下田市観光ヒアリング調査報告：概要

著者	狩野 美知子, 野方 宏, 太田 隆之
雑誌名	静岡大学経済研究
巻	15
号	3
ページ	53-62
発行年	2011-01-31
出版者	静岡大学人文学部
URL	<a href="http://doi.org/10.14945/00005726">http://doi.org/10.14945/00005726</a>

## 研究ノート

# 第2回下田市観光ヒアリング調査報告：概要<sup>1</sup>

狩野美知子・野方 宏・太田隆之

### はじめに

静岡大学人文学部経済学科の教員からなる観光研究プロジェクト・チームは、これまで伊豆地域を中心とした観光調査・研究を行ってきた。その一端は『調査報告』としてこれまで本誌に発表してきた<sup>2</sup>。

今回の調査対象は下田市観光であり、下田市役所観光交流課および下田市観光協会を対象に2010年8月24日・25日にヒアリング調査を実施した。調査にあたり事前に以下の調査項目を送付し、これに沿った形でヒアリング調査を行なった。

#### <下田市役所観光交流課>

1. 観光統計関連資料等の収集
2. 観光振興についての独自の取組み・支援策など
3. 県および他市町村との連携の状況
4. 観光産業の位置付け
5. その他

#### <下田市観光協会>

1. 伊豆観光圏に関する統計関連資料等の収集
2. 伊豆観光圏申請をめぐる経緯・目的など

---

<sup>1</sup> 今回のヒアリング調査を含めた2010年度の観光研究プロジェクトに対し、静岡大学人文学部より研究資金の助成を受けた。また、ヒアリング調査に協力いただいた下田市役所観光交流課課長補佐高橋尚志氏並びに下田市観光協会事務局長清野文隆氏にお礼申し上げます。

<sup>2</sup> 例えば、伊豆地域の主要観光地の調査報告としては以下を参照されたい。石橋・野方（2006）、石橋・野方・大脇・朴（2008）、狩野・野方（2009）、狩野・野方・大脇・朴（2009）。

3. 伊豆観光圏の独自の取組みなど
4. その他

なお、本観光研究プロジェクト・チームは2005年12月にも下田市役所観光商工課および下田市観光協会にヒアリング調査を実施しており<sup>3</sup>、今回は5年ぶり2回目の調査である。

ヒアリング調査報告を記す前に、下田市の概要を簡単に要約しておこう。

下田市は、伊豆半島南部東側に位置し、人口は25,189人(2010年6月1日現在)である。市内には、行基による開湯伝説のある蓮台寺温泉を中心に白浜温泉、河内温泉などがある一方で、47kmの海岸線には水質の良好な9つの海水浴場がある。また、1854年のペリー来航に象徴される幕末の開国をめぐる歴史の色濃い街でもある。

## 1. 下田市観光交流課におけるヒアリング

日時：2010年8月25日 10：00～11：30

応対者：下田市役所観光交流課 課長補佐兼観光戦略係長 高橋尚志氏

### (1) 観光動向

まず、下田市の観光動向をみておこう [図1、表1参照]。

観光交流客数のピークは1987年度（昭和62年度）の626万人であり、その後の10年間は多少の増減を示しつつ基本的には減少傾向を示したが、それでも1997年度（平成9年度）までは500万人台を維持していた。しかしそれ以降現在まで減少傾向が明確になり、2009年度（平成21年度）は300万人を切り（294万人）、ピークの半分以下（47%）まで減少した。もっとも、2002年度から2008年度までの減少の程度は比較的穏やかであり、平均して340万台を維持していた。2009年度は対前年で△51万人、率にして△15%と減少幅が大きい<sup>3</sup>が、これは前年秋の金融危機による景気の急速な後退による影響と考えられる。

宿泊客のピークは1994年（平成6年）の187万人であるが、宿泊客についてもピーク以降の基本的傾向は観光交流客数と同様な傾向である。図1にみるように、宿泊客数は2004年度までは低下傾向を示し100万人を切る状況であったが、2005年度以降の数年間には再び110万人台まで回復をしていた。しかし、2009年度は86万人とピークの47%の水準であり、対前年比で△25万人、△22%と大幅な減

<sup>3</sup> 詳しくは、野方（2006）を参照されたい。

少を記録した。観光交流客数と同様、急速な景気の悪化が原因と考えられる。

観光交流客数の減少の背後には、宿泊客数とともに海水浴客数などに代表される行楽客数の減少が指摘できる<sup>4</sup>。例えば、海水浴客数は1984年度の173万人から2009年度には54万人と25年間で69%も減少している [図2, 表2参照]。次項でみるように、下田観光の魅力の1つが海であることを考えると、海水浴客の減少は深刻な問題である。なお、観光資源としての海に関する支援策の一端は次項で述べる。

## (2) 観光資源と支援策

下田市の魅力として「海」「食べ物<sup>5</sup>」「(歴史) ウォーキング」があげられる。下田市役所は観光協会と一体となり、「まちあるき」と「海洋浴」をキーワードに、これらの観光資源を活かした観光地づくりのための支援策を展開している。

下田市は前述のように開国歴史のまちであり、毎年5月には黒船祭を開催している。2009年の第70回黒船祭では3日間で18万人を上回る参加者があった。また、12月から1月の水仙まつりや6月のアジサイ祭りも毎年開催され、2009年にはそれぞれ25万人、18万人が参加した。こういったイベントを通じて観光客を下田の情緒漂う「まちあるき」に誘導しつつ、街中での買い物を促そうとしている。さらに今年の夏は、青年会議所の協力のもと観光協会が中心となって、ペリーロードでのキャンドル・カフェ<sup>6</sup>が開催され、25,000人の来場があった。また「まちあるき」の実験的試みとしてミステリーツアー<sup>7</sup>を実施し、旧市街地への誘導と商店街の活性化が図られた。なお、下田市は2001年に設立された観光ボランティアガイド協会に補助金を交付し活動を支援してきているが、2008年10月にはガイド案内実績が7万人に達している。

最近の健康志向ブームのなかウォーキングが注目を集めているが、下田市は下田ノルディックウォーキング協会の月例大会の活動やてくもぐウォーク実行委員会、伊豆早春フラワーウォーキング実行委員会にも補助金を交付し、支援を行っている。「伊豆半島花&てくもぐウォーク」は、熱海市、伊東市、伊豆の国市、伊豆市、下田市、東伊豆町、河津町、南伊豆町の8市町と、伊豆急行、伊豆箱根鉄道、東海自動車の交通機関3社が共同企画で開催するイベントである。四季を通じて開催され、各地の花、食、景色を楽しめるコースが用意されており、2010年度は、年間10回開催され

<sup>4</sup> 海水浴客の中には日帰り客とともに宿泊客もいるため、ここでは便宜上観光レクリエーション客ではなく、行楽客という言葉を使っている。なお、静岡県の観光統計では、観光交流客数は宿泊客数と観光レクリエーション客数の合計であり、後者は観光施設・スポーツレクリエーション施設およびイベントや行祭事への入場者・参加者数である。

<sup>5</sup> 魚介類、特に金目鯛は水揚げ量日本一である。

<sup>6</sup> 8月1日～7日、市内を流れる川沿いに1300個のキャンドルを灯した。その灯りがその辺り一帯の昔の建物とともに雰囲気を醸し出し、好評であった。

<sup>7</sup> 下田市を訪れた観光客に地図を渡し、それに基づき各自で街中を歩くというもの。

る予定である。また、伊豆早春フラワーウォーキングは、下田市、河津町、南伊豆町、松崎町の市町と観光協会などが共催で実施し、1月から4月にかけて、各市町にちなんだ花のコース<sup>8</sup>を歩くウォーキングを開催する。いずれも2日間の開催のため、各観光協会が宿泊の斡旋も行っている。2009年1月実施の下田水仙ツーデーマーチの参加者は2日間で延べ1,644人、うち市外からの参加者は88%を占め、誘客に大きな効果があった。後述する伊豆観光圏の形成には、こういった他市町や交通機関と連携したイベントがすでに行われているという実績も評価されたと思われる。

下田市内には9つの海水浴場<sup>9</sup>があるが、ミネラルを多く含んだ海風を浴び、森林浴ならぬ「海洋浴で癒しと健康づくり」というのも下田市のウリの1つである。「9月も泳げる下田のビーチ」というコンセプトの下、ビッグシャワーという海洋浴の祭典<sup>10</sup>も毎年9月に開催されている。また、自然体験活動の推進にも取り組み、伊豆海洋自然塾の海洋自然教育マイスター養成講座の支援も行い、こちらのボランティアの養成にも力を入れている。

### (3) その他

他の市町との連携の取り組みでは、フラワー都市交流連絡協議会<sup>11</sup>の活動を支援しているが、この協議会は市民レベルの交流事業が中心であり、特に広域観光のための連携に取り組んでいるわけではない。年に1度市民交流団を派遣し、花を活かした街づくりの交流を行ったりハンギング・バスケット・ストリートの活動を競ったりしている。なお、広域連携に関しては、伊豆観光圏のこれからに期待する一方で、その事業を担う人材が、財政面においても人的側面においても十分ではない状況がうかがえた。

下田市では外国人観光客の誘客に関する特別な活動はしておらず、一部大型ホテルが日本のエージェンツ経由で外国人を受け入れている状況である。しかし、首都圏で生活をしている欧米系の外国人が、週末を下田で過ごすケースがあり、もともと外国人観光客は多いほうである<sup>12</sup>。外国人観光客の誘客に関しては、伊豆東海岸国際観光モデル地区推進協議会の活動の中で、これまで韓国・

<sup>8</sup> 1月下田水仙、2月河津桜、3月菜の花とみなみの桜、4月松崎のナマコ壁とソメイヨシノ。

<sup>9</sup> 白浜中央海水浴場、白浜大浜海水浴場、外浦海水浴場、九十浜海水浴場、鍋田浜海水浴場、多々戸浜海水浴場、入田浜海水浴場、吉佐美大浜海水浴場、田牛海水浴場。ほとんどの海岸が、環境省の水質検査で水質AA（きわめて水質の良好な海水浴場）に指定されている。

<sup>10</sup> ノルディックウォーキング、フラダンスフェスティバル、ビーチヨガ、サーフセミナーといった参加型マリンスポーツを中心としたイベントである。

<sup>11</sup> 1983年に、球根でつながる4都市（あやめの山形県長井市、水仙の下田市、鉄砲ユリの鹿児島県和泊町、チューリップの富山県砺波市）からスタートし、現在9都市（北海道中富良野町のラベンダー、福岡県久留米市のつつじ、兵庫県宝塚市のすみれ、岐阜県大野町のバラ、山口県萩市の椿）が加盟している。ただし、当初の4都市のうち、下田市以外は球根を栽培し出荷しているが、下田市は球根で増える野水仙で観光客を呼び込んでいるという程度のつながりであった。

<sup>12</sup> 伊豆東海岸国際観光モデル地区推進協議会がまとめた調査によると、下田市の2009年度外国人観光客宿泊者数は、韓国91名、台湾1,470名、中国401名、アメリカ316名、その他414名、合計2,692名となっている。

台湾向けの現地宣伝用のDVDをつくり宣伝活動を行ってきた程度であった。しかし、今回の上海万博で下田の知名度の低さが明らかになった結果、韓国・台湾の2国に加えて中国向けのPRの必要性が認識されることとなった。予算面の制約から、協議会で作った他の市町のものに下田独自のものをあわせたPRを今後行っていくことが予定されている。

新たな外国人観光客の誘客を考える場合、従来は成田・羽田空港が念頭に置かれていたため、これら空港から下田まで足を運んでもらうためには、どうしても1日余分に宿泊することが必要となり、パッケージ・ツアーが作りにくいという問題があった。昨年6月に開港した富士山静岡空港(以下、静岡空港)についても同様のアクセスの問題がある。中国人観光客にとって富士山は魅力的といわれているが、静岡空港から駿河湾フェリーを使って伊豆市土肥まで来ても、土肥から下田は路線バスしかなくさらに日程的に難しいからである。以前は、静岡県の防災船TSLが下田・清水間を運行していたが現在は廃止されている。また、静岡空港から下田まで海上交通の利用を考える場合、伊豆南端の石廊崎沖は海の難所であり、天候により欠航の可能性もある。このように、静岡空港からの駿河湾海上ルートもアクセスに関してハードルは高い。しかし、ハードルを低める動きも最近でてきている。それは、松崎での港湾整備であり、松崎・下田間が車で1時間足らずの距離にあることを考えると、静岡空港と松崎との海上ルートが可能となれば、外国人観光客をめぐって新たな展開が開けてくるかもしれないという期待感が生まれてきている。

## 2. 下田市観光協会におけるヒアリング

日時：2010年8月24日 13:00～14:30

応対者：下田市観光協会 事務局長 清野文隆氏

下田市観光協会は、下田市役所観光交流課と一体となって事業を進めているため、ここでは前節と重複する部分は省略し、伊豆観光圏の取り組みを中心にまとめる。

下田市観光協会は、2010年4月に観光庁から認定された伊豆観光圏の事務局となっているが、まず、この観光圏が認定されるまでの経緯について述べておく。

2008年5月に観光圏整備法が制定されて以降、静岡県は観光圏に注目し、県内の自治体に観光圏の形成と申請を積極的に働きかけた。2009年7月に、静岡県は伊豆地域の首長を集め、観光圏の形成と申請を促した。しかし、首長らは乗り気ではなく、その時は具体的な観光圏の話には至らなかった。しかしその後、下田市と南伊豆町それぞれの観光協会の若手のメンバーが観光圏に関心を持ち、静岡県観光政策室に制度内容等について照会した。その後同市町の行政に働きかけることで、

観光圏の形成への機運が高まった。そして伊東市、東伊豆町、河津町など周辺自治体の1つ1つに働きかけながら、2市3町による観光圏を申請するに至った。この過程で国への申請書類や事業計画等は、下田市と南伊豆町の観光協会のメンバーが中心となって作成し、本年4月に伊豆観光圏として国土交通省より認定された<sup>13</sup>。このように、伊豆観光圏の場合、これらの市町の観光協会の若手のメンバーが観光圏形成の担い手になったという経緯がある。

伊豆観光圏のテーマは「海へ山へ、そして温泉～海洋温泉ストーリー伊豆」であり、具体的事業として、「東伊豆海岸ウォーキング事業」、「伊豆まるごと周遊ツアー事業」、「季節の花めぐり周遊事業」「伊豆の自然体験事業」などが実施される見通しである。また、来年度より松崎町、西伊豆町、伊豆市および伊豆の国市の4つの自治体がこの観光圏に参加する予定であり、観光圏という視点からの観光振興に期待が高まる。

このように、伊豆観光圏では観光商品の開発や新事業の実施を中心に、今後様々な取り組みを行ってこの地域の観光振興に取り組んでいこうとしている。しかし、現在、観光圏として観光振興を推進していく上で、次の3点の課題を抱えている。いずれも組織的体制に関わる諸点である。

まず第1に、観光圏を推進する担い手が不足している点である。観光圏内の観光協会はどこも人手不足で、事務局がある下田市観光協会も観光圏の仕事従来の観光協会の仕事と並行して行っている状態である。これは観光圏を推進する人的体制が整っていないことを意味しており、今後「緊急雇用対策事業」による専任職員を採用していくことを検討しているとのことであるが、一番の懸念事項である。

第2に、観光圏内の事業実施に伴う費用負担の配分である。伊豆観光圏は国からの補助金がつかず静岡県からの補助金（補助率40%）のみであるため<sup>14</sup>、今後実施する事業の費用負担と観光圏内の主体に対してどう配分するかは、大きな課題となる。また、観光圏内の観光協会は、それぞれの自治体から補助を受けている。そのため、自治体から受けている補助金を観光圏の事業に使うことになれば、事実上自治体が事業を実施していることになる。下田市観光協会では、このような補助金の使い方は望ましくないと考えている。この点については、以下にみる観光振興が有する外部性と補助金、そしてその状況の中での主体間の費用負担をどうするか、という論点が含まれている。観光振興の取り組みの便益が下市内にも観光圏にも広がりうる外部性を有するとすれば、限られた人員と資金の中で下市の観光振興と観光圏の実務の両方を担っている現在の下田市観光協会の活動は、両方に寄与する。したがって、下田市観光協会に対する補助金を観光圏の事業にも援用す

<sup>13</sup> 観光庁に認定された観光圏は現在45地域であるが、このうち4地域は補助金の交付されない地域となっており、伊豆観光圏はこの4地域のうちの1つである。

<sup>14</sup> 国からの補助金がないにもかかわらず観光圏の認定を受けるメリットとして以下の2点が指摘できる。1つは観光圏の認定により、特例が認められることである。例えば、旅行商品の開発・販売といったいわゆる着地型観光が可能になる。もう1つは観光圏の認定により、観光地としての認知度が高まることである。



ることには経済的合理性があると考えられる。こうした論点を含め、観光圏の事業の費用負担の配分は興味深い問題であり、観光圏をめぐる今後の研究課題の1つといえよう。

第3に、上記の2つに関連して、観光圏内の主体間の連携が必ずしも十分に取られておらず、確固たる組織体制がまだできていない点である。これは次の2点についてみられる。まず、伊豆観光圏を推進する中心的組織であり、観光圏内地域の情報を収集・発信し、企画立案や各市町間の調整を行う「海洋温泉ストーリー伊豆ツアーセンター（仮称）」をどこに設置するかが確定していない。もともと、観光圏内の自治体にある観光協会同士の連携はとれていたが、これについては合意ができていない。次に、統一性のある観光商品の開発ができていない点である。観光圏には旅行法上の特例が設けられており、国から認定を受ければ、伊豆観光圏を前面に出した事業や観光商品の開発・販売が可能になった。静岡県もこの特例に注目して新たな観光商品の開発を求めており、JR東日本も参加して旅行商品の開発に取り組みつつある。しかし、観光圏内の各地域に商品案を求めても、観光圏としての統一性を生み出すには至っていない状態である。

先にみたように、伊豆観光圏は下田市と南伊豆町の観光協会の若手のメンバーが他市町の観光協会や行政を巻き込んで形成に至っており、ボトムアップ型の組織形成であった点で特徴的である。観光関連産業は観光圏を結成した地域全体の経済の要であることから、観光圏という枠組みからの観光振興は大いに必要とされる一方で、上記の課題を抱えており、観光圏として即座に観光振興の成果を上げるには難しい状況にある。また、既述のように現在事務局を務めている下田市観光協会では人員が不足しており、担い手の確保が急務である。無論、各地域において人員の確保と人材の養成を行っていく努力は必要であるが、少子高齢化が進行し、青年層の人口が大きく減少している伊豆観光圏内の地域において、自助努力だけでこれらのことに取り組んでいくことは難しい。伊豆観光圏が着実な成果を上げるためには、人的支援を中心とした静岡県や国の更なるサポートが必要であろう。

## 参考文献

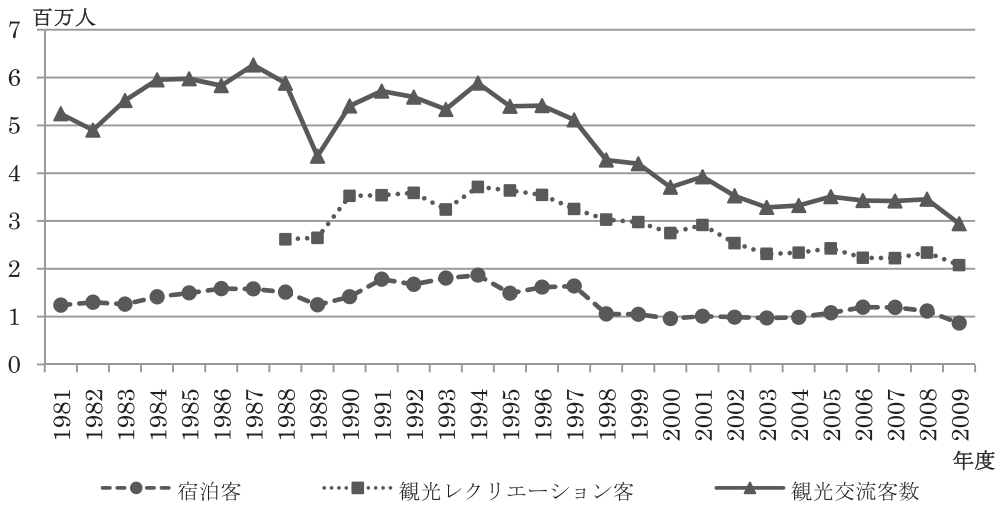
- [1] 石橋太郎・野方宏(2006)「伊東市観光ヒアリング調査報告」静岡大学『経済研究』11巻1号(2006年7月) pp.55-60.
- [2] 石橋太郎・野方宏・大脇史恵・朴根好(2008)「第2回伊東市観光ヒアリング調査報告」静岡大学『経済研究』13巻1号(2008年7月) pp.67-74.
- [3] 狩野美知子・野方宏(2009)「第2回熱海市観光ヒアリング調査報告」静岡大学『経済研究』14巻3号(2009年12月) pp.23-33.
- [4] 狩野美知子・野方宏・大脇史恵・朴根好(2009)「第1回伊豆市観光ヒアリング調査報告：概要」



静岡大学『経済研究』14巻1号（2009年7月）pp.53-60.

- [5] 野方宏（2006）「下田市および松崎町観光ヒアリング調査報告」静岡大学『経済研究』11巻1号（2006年7月）pp.61-70.

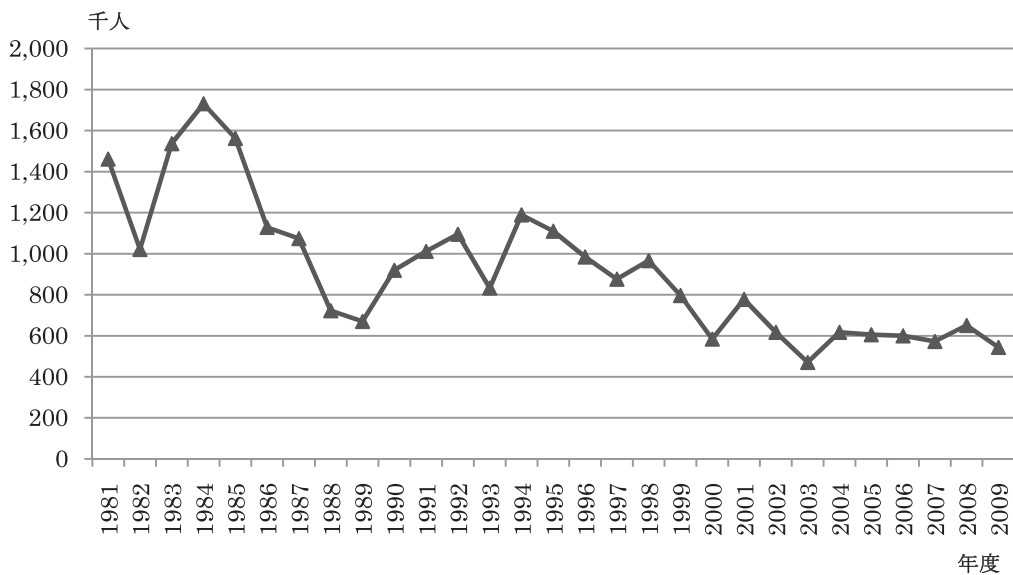
図1. 下田市観光交流客数の推移



出所：1981年～1987年は下田市観光交流課の資料より，1988年以降は静岡県文化・観光部観光局観光政策課「平成21年度静岡県観光交流の動向」より筆者作成。

注：下田市観光交流課の資料には観光レクリエーション客数の記載がない。上記の下田市観光交流課の資料の1988年以降の数値と「平成21年度静岡県観光交流の動向」の数値は一致している。なお、1999年度までは観光レクリエーション客数の統計の取り方が異なるため、宿泊客数と観光レクリエーション客数の合計が観光交流客数と一致しない。

図2. 下田市海水浴客数の推移



出所：下田市夏期海岸対策協議会の資料より筆者作成。

表1. 下田市観光交流客数の推移  
(単位：人)

年度	観光交流客	宿泊客	観光レクリエーション客
1981	5,244,225	1,241,066	—
1982	4,900,429	1,301,369	—
1983	5,519,694	1,261,649	—
1984	5,953,933	1,415,819	—
1985	5,975,579	1,496,776	—
1986	5,833,199	1,585,769	—
1987	6,263,414	1,580,244	—
1988	5,884,018	1,511,334	2,618,074
1989	4,357,156	1,248,232	2,648,040
1990	5,406,563	1,415,872	3,525,884
1991	5,717,213	1,783,041	3,539,869
1992	5,592,471	1,675,745	3,589,027
1993	5,334,920	1,805,740	3,240,814
1994	5,884,715	1,867,153	3,712,722
1995	5,399,798	1,489,862	3,638,757
1996	5,414,108	1,617,257	3,546,066
1997	5,114,940	1,639,718	3,252,542
1998	4,277,160	1,057,699	3,029,608
1999	4,197,912	1,050,086	2,977,412
2000	3,708,259	959,313	2,748,946
2001	3,926,028	1,008,412	2,917,616
2002	3,526,812	989,056	2,537,756
2003	3,284,810	972,185	2,312,625
2004	3,324,191	985,951	2,338,240
2005	3,507,890	1,080,223	2,427,667
2006	3,429,193	1,198,556	2,230,637
2007	3,418,601	1,194,808	2,223,793
2008	3,457,344	1,117,473	2,339,871
2009	2,943,673	866,118	2,077,555

出所：1981年～1987年は下田市観光交流課の資料，1988年以降は静岡県文化・観光部観光局観光政策課「平成21年度静岡県観光交流の動向」。

注：下田市観光交流課の資料には観光レクリエーション客数の記載がない。上記の下田市観光交流課の資料の1988年以降の数値と「平成21年度静岡県観光交流の動向」の数値は一致している。なお、1999年度までは観光レクリエーション客数の統計の取り方が異なるため、宿泊客数と観光レクリエーション客数の合計が観光交流客数と一致しない。

表2. 下田市海水浴客数の推移  
(単位：人)

年度	海水浴客
1981	1,460,800
1982	1,020,685
1983	1,536,100
1984	1,730,600
1985	1,562,000
1986	1,128,000
1987	1,074,000
1988	722,000
1989	670,000
1990	919,206
1991	1,011,431
1992	1,094,685
1993	832,475
1994	1,189,414
1995	1,109,812
1996	984,408
1997	875,874
1998	966,040
1999	796,397
2000	583,771
2001	777,668
2002	617,155
2003	470,322
2004	616,936
2005	605,464
2006	600,015
2007	572,467
2008	650,114
2009	543,321

出所：下田市夏期海岸対策協議会。